

小 品 集

倉 田 稔

も く じ

はじめに

1

民主文学について

小樽商科大学附属図書館所蔵、

マルクス『資本論』第一巻ドイツ語版 初版

福沢諭吉の『新女大学』

エンゲルスと『家族・私有財産および国家の起源』

2

『グローバル資本主義の物語』

3 オーストリア関係

書評 エーリヒ・ツェルナー『オーストリア史』

書評 島崎 隆『ウィーン発の哲学』

『ハプスブルク歴史物語』によせて

『ウィーンの森の物語』

『ハプスブルク・オーストリア・ウィーン』

『ハプスブルク文化紀行』

はじめに

今まで書いたもので、公表されたもの、されていないものを含めて、出すことにした。

1

民主文学について

プロレタリア文学がかつて日本にあった。最も盛んだったのが昭和初期であり、むしろ頂点は日本ではその時だけである。その代表者は、小林多喜二、中条百合子、徳永直の『太陽のない町』である。これらは、時代が生んだものである。この勢いはたいしたものであって、例えて云えば、芥川龍之介が自分の文学に絶望した理由となった（参考、宮本顕治「敗北の文学」、松本清張「芥川龍之介の死」）。プロレタリア文学が新しい魅力のあるジャンルとして登場したのだった。その後、日本のプロレタリア文学は、治安維持法によって弾圧された。戦後はそして最近では、プロレタリア文学は民主文学と云われた。

プロレタリア文学の本質は、社会の矛盾をつくものである。文学とは、その作品への同感、感激、感動、心を豊かにすること、カタルシスを得ること、などが本質である。これらを仮に、以下、面白さと云おう。プロレタリア文学も文学なので、そうあるべきである。

小林多喜二がかつて渡辺順三に云ったように、「ちかごろの短歌はつまらないよ」という発言（渡辺順三の、自伝）に注目すべきである。短歌を作るには、世界的大文学を読むこと、思想書を読むことが、必要である（拙書『大塚金之助論』成文社 五九ページ）と、小生は書いたが、民主文学派の小説を作る場合も同じである。そして多喜二は、東京の監獄で差入れて貰ったフランス文学などを讀んだ後、具体的に言えば、ディケンズやバルザックを讀んで、「ぼくたちの作品が、……(小説どころか) 綴方位でしかなかった」と書いた(1931年1月13日、蒔田榮一あて手紙から)が、その意味をよく考えるべきだろう。フランスの小説やロシアの小説(例えば、ユーゴー、デュマ、ドストエフスキー、トルストイ)は、小説の本道をゆくが、それくらい面白いものを書くべきだろう。

この問題と関わっているのは、日本の文学が私小説が主だったこと(1)、ま

たスケールの大きい小説は書けないこと(2)、精神小説が好きだ(3)という事情がある。だがこれはここでは論じない。

ブルジョア文学は、何でもテーマにし、何でも書ける。だからそれだけでも小説を面白いものにできる可能性が大きい。一方、プロレタリア文学は何でも書けるわけではない。だからそれだけにむずかしい。しかしプロレタリア文学には、それだけ独得の面白さがある。ブルジョア文学に飽きてしまい、プロレタリア文学に面白さを求める場合がある。例えば、運動家と官憲の闘いなどは面白いものである。感動的な例として、中国の小説『紅岩』がある。

プロレタリア文学から民主文学への移行行きには、根拠がある。社会が変わったのである。社会学的に言えば、大衆社会が登場した。経済的に云えば、生産力の発展により階層が変化した。ホワイト・カラー、会社員、セールスマン、知識階層が増大した。第1・2次産業人口が急減した。かつてのように、働く人が労働者・農民だけというわけではなくなった。この新しい人々も、新しい生活、働く生活を持っている。彼らが、国を支えている。例えば、教員もそうである。日本の作品では、石川達三の『人間の壁』がすでにある。セールスマンの悲哀は、アーサー・ミラーが描いている。現在では、ストレートに階級闘争、小作争議、労働運動を書くだけでは足りない。多面的な勤労者の生活と世界が登場している。それらを文学でつかまえる必要がある。一九九九年の小樽多喜二祭での講演者も、既成の現今の小説にそういうものが沢山ある、と語った。民主文学という概念を拡大する必要がある、今ある。

- (1) 漱石でさえ、「猫」「坊っちゃん」「草枕」は、私小説である。
- (2) 例外は、「大菩薩峠」「背教者ユリアヌス」。
- (3) 漱石が愛される理由である。

(『群来』再刊第六号)

1999年9月17日筆

小樽商科大学附属図書館所蔵、

マルクス『資本論』第一巻ドイツ語版 初版

小樽商科大学の附属図書館には、アダム・スミスの『国富論』、マルサスの『人口論』など、多くの歴史的名著が所蔵されている。しかし、それらが結構知られていないのである。

その中で、最も有名なものは、カール・マルクス（一八一八—一八八三）の『資本論』第一巻ドイツ語初版（一八六七年出版）であろう。これは、ドイツのハンブルグ、マイスナー書店から出された。同フランス語版初版も同様に、商大に所蔵されている。同窓生でさえも、これがあることは知っていても、その来歴はあまり知らないであろう。

小生は、『カール・マルクス『資本論』ドイツ語版初版』（成文社 一九九七年）を刊行し、そこで、同書がどんなものか、その来歴を、徹底的に調べた。

このドイツ語版『資本論』初版は、小樽高商教授で、小樽商科大学初代学長にもなった、故大野純一氏が所蔵していて、大野先生のご遺族が、一九八三年に小樽商大図書館に遺贈されたものである。

『資本論』初版は、世界に百冊くらいは現存しているであろう。小樽商大の『資本論』は、そのうちでも著者マルクス本人の献辞入りなので、珍しいものであった。つまりリーナ・シェーラーなる女性に献呈されているのである。その献辞はこうある。「わが友リーナ・シェーラーへ、ロンドン、一八六七年九月一八日」。

献辞入り本は世界で二〇冊ある。だがその上、商大の本は、製本されていない、いわゆるペーパー・バックである。これが珍しいことがわかるのであった。この種のものは、日本では他には二冊あるいは三冊しかない。普通、現存の『資本論』は、ヨーロッパ人が当時よく行ったように製本表紙をつけられている。それがないので、商大本は、出版された当時のままである。

この話は、小生に対して行われたインタビューにより、『北海道新聞』一九九七年四月一六日号朝刊第一面にも載っている。

私は世界における『資本論』の所在を、ドイツや日本の資本論文献研究者の書物や論文などの文献で調べ、初めに一九八九年に論文にしたのだが、数人の学者からも貴重な資料の提供を受けた。前記小冊子は、それを一部修正したものである。

マルクスの献呈した相手カロリーネ・シェーラーについても、分かった。彼女は、ドイツ人生まれで、マルクス家族の友人であった。マルクス夫人の弟と婚約したことがあり、その後、破談となった。主にイギリスで、家庭教師をして働いていた。ロンドンに亡命中のマルクスから、発行されて数日後、『資本論』を贈呈されたのである。

さて大野教授はこの『資本論』をどのようにして入手したかのを、私は、教授の買った先の当時のドイツの古本屋のカタログ、日本の新聞、教授の生活状態、当時の外国為替を調べ、どのくらいで買ったかを論じた。

大野教授がドイツ留学中、ドイツの古本屋ヘラースベルグから、一九三〇年に、自費で買ったのである。多分、五〇〇マルク余、それゆえ当時の二五〇円余、教授の一月半くらいの月給をはたいて、買ったものである。買った時には、『資本論』はヨーロッパによくある本のように袋とじのままであって、大野教授がペーパー・ナイフを入れた。

大野教授は、『資本論』を持っていることをあまり人に言わなかった。もちろん一九三〇年代の途中から一九四五年までは、日本では『資本論』は厳禁の書であったから、所有していることを誰にも言えないが、戦後も、あまり吹聴しなかった。商大図書館に寄贈した一五年前から、商大にはこれがある事自体はよく知られた。

そして結論から言えば、商大の持っているタイプの『資本論』は、滅多にない、当時のままの、ほぼ完全な形の初版本である。

私が今度出した前記冊子は、市販されているし、小樽商大緑丘会事務室でも取り扱っている。この本を読んで、商大図書館に来て、ちょっと『資本論』を見ていただくのも、一興であろう。

福沢諭吉の『新女大学』

福澤 [以下、福沢と書く] 諭吉 (1834-1901, 天保5-明治34) は、日本における男女対等論を最も早く発表した近代思想家である。彼は、徳川幕府時代の下級武士として、中津藩 (大分県) に生まれた。幕末と明治の時代の啓蒙的大思想家であった。

彼は大阪で学び、その後、江戸に出て、初めオランダ学、その後、英学を学んだ。彼は明治時代の大教育家であり、高名な著述家であった。福沢は、封建制度とその思想に反対した。

多数の著述の中で、彼は女性論も書いたが、さしあたり、彼の女性論で有名なものは、「新女大学」全23章である。これは『福沢全集』(国民図書株式会社)第六卷(大正15年)に収録されている。この書は、初め、彼の創った『時事新報』で出た。

この本の標題は、江戸時代の貝原益軒(1630-1714)の「女大学」にちなんでつけられたもので、「新」としたのは、貝原の、古い「三従七去」などの日本の封建的女性道徳に反対したからである。「三従」とは、女性は、初めは父に、次いで夫に、最後に息子に従えというものである。福沢は、貝原の本をよく読んでいて、評注を書いていた。それは「女大学評論」である。

この「新女大学」は、「女大学評論」とともに、明治32年(1899)11月に発行された。

福沢は、その「新女大学」で、こう薦めている。

女子に、男子と同じように運動をさせること。夫は、妻の子育てに助力すること。女性が、詩歌管弦、お茶、華、などの教養だけでなく、むしろそれらは適当にしておいて、女性が学問をすること、特に物理や経済や法律を学ぶべきだ、などである。最後の説は、彼の『学問のすすめ』の教えと同じである。また、その教育論は、メアリ・ウルストンクラフトのそれにも似ている。それ以外に彼は、親が娘に結婚を無理強いしたりしないこと、女性が自分の乳で子供を育てた方がよいこと、女性は気品を持っているべきだ、などと奨めている。

当時、つまり明治時代にこういうことを述べたことは、一部の議論を除き、画期的なことであった。

その書「新女大学」で福沢が言うことを、さらに少し紹介する。

福沢が「女子に経済の思想を要す」(627 ページ)というのは、女性が夫に先立たれたりしたなら、女性は自分で家の経済・経営をしなければならないからだ、と彼は言う。「そ[経済]の思想の皆無なるこそ 女子社会の無力なる原因中の一大原因」(611 ページ)である、と。

福沢はまた、夫を亡くした女性に、再縁(=再婚)を奨める。それを禁止するのは、「貞女 二夫にまみえず、など 根拠もなき愚説」(633-4 ページ)であると、一蹴する。

福沢の議論は、現在の日本ではほとんど常識になっているし、部分的には古い所もある。それはしかし当然であろう。だが、次のような要求には、現在の日本男性でもグサリとくる人もいるだろう。

子育てについて、彼は言う。「父たる者は、そ [=妻] の苦勞を分ち たとひ戸外の業務あるも 事情の許す限りは 時をぬすんで 小児の養育に助力し 暫くにては 妻を休息せしむべし」「夫が 妻の辛苦をよそに見て 安閑たるこそ 人倫の罪」であると。(607-8 ページ)

福沢は、日本の国際化を目前として、旧来の日本女性のあり方では恥ずかしいと思い、常々考えていることを、このように一気に論じた。

なお、彼には、明治 18 年発行の「日本婦人論」もある。福沢について、最も詳しい早い伝記は、石川幹明の『福沢諭吉伝』全 4 部である。

エンゲルスと『家族・私有財産および国家の起源』

フリードリヒ・エンゲルス (Friedrich Engels, 1820-1895) は、友人のカール・マルクス (1818-1883) が亡くなって、労働者運動で「第 2 ヴァイオリン」を弾くことになった。エンゲルスは、マルクスの遺稿の中から、編集して、多くの作品を出版した。その中で、彼は、マルクスの『古代社会ノート』(1) を発見した。それは、アメリカの人類学者、ルイス・ヘンリー・モルガン(1818-

81) (2)の著書『古代社会』をマルクスが読んで、ノートをしたものだった。エンゲルスは、それを利用して、モルガンとマルクスの古代社会論を整理した。それに加えて、古典・古代、封建時代、近代の歴史を描き、書物『家族・私有財産および国家の起源』(Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats.)として、一八八四年に発表した。

マルクスは人間の歴史の通史を書かなかったので、エンゲルスによるこの本書は、マルクス主義の歴史学の標準的書物とされた。後にレーニン(1870-1924)は、本書を利用して、『国家と革命』を書くのである。

エンゲルスによれば、初めの人間の社会は母権制の時代だった。そして、国家・私有財産が登場して、女性の世界史的敗北が始まった。つまり、武装権力としての国家ができ、男性が戦士として活躍するようになり、男性が社会の中心になり、母権制が倒れ、父権制の時代が始まったのである。エンゲルスはまた、歴史上の家族の成立と発展を調べ追求する。種々の婚姻の形を調べ、群婚=集団婚から単婚へ発達したとする。同時に、近い血筋の婚姻が排除され、血縁の遠い人々どうしが婚姻を結ぶようになる。この単婚(=一夫一婦制)時代より以前は、女性が社会の中心にいた。子供の父が誰だか分からないからであった。歴史が始まり、国家が成立し、父権制の時代がやってきて、男性中心の社会となり、これが現代まで続いている。しかしこの人間の歴史は、近代資本主義の時代の後、男女平等な社会となるだろうと、エンゲルスは予想した。

こうして本書は、一種の女性論でもある。ベーベルの女性論(連載3で、すでに論じた)の直後に書かれた書物でもある。

本書は、日本でも数種の翻訳がある。しかし今のところ、国民文庫版、あるいは新日本出版の翻訳で読むのが一番よい。ちなみにマルクスはフェミニストではなかったが、エンゲルスはフェミニストであった。

- (1) これは、『マルクス・エンゲルス全集』に入らないで、別個に出版・翻訳された。

- (2) Lewis Henry Morgan.その他、著作には、ビーバーの研究、アメリカ先住民の研究、などがある。

2

『グローバル資本主義の物語』

小生は、今年二〇〇〇年三月に、著書『グローバル資本主義の物語』を、日本放送出版協会からNHK ブックスとして、出版した。これを聞いて、北海道新聞のN記者が、わが家に来て、インタビューをした。それに対して私は、本書については次のように語った。

第一に、同じNHK ブックスとして、かつて『ハプスブルク歴史物語』、『ウィーンの森の物語』を出版したが、今度の書でいわば、三部作が終わる。第一の書は、ヨーロッパ最大の帝国、ハプスブルク帝国の歴史であった。第二の書は、その舞台となったウィーンの現在と人々である。ヨーロッパでもウィーンでも、第三世界と関わりがある。それで、今回の第三の書では、第三世界を先進国との関連で論じた。特に、第三世界によって先進国が支えられている。難民や外国労働者が先進国に押し寄せている。

第二に、ハプスブルク帝国はEU と似ているとされ、その関連で調べた。スペイン・ハプスブルク帝国の時代からEU までを通観した。だが、それほど似ているとは思えない。

第三に、現在はアメリカ経済が世界を支配しており、EU との関連でそれを見たが、実際は、アメリカの超巨大財閥が世界経済を支配している。

第四に、経済史的観点では、世界的覇権国が変化している。初めスペイン＝ハプスブルク、その後、オランダ、イギリス、そしてアメリカとなった。

第五に、自由競争市場と保護関税とが対抗していて、それは善悪の問題ではない。

第六に、世間で語られる疑問、戦争はどうして起きるのか、という問題にも答えようとした。

以上であるが、N記者と話をしながら気づいたことは、第一に、ハプスブルク帝国が現在のアメリカの地位を世界経済の中で持っていたこと。第二に、ハプスブルク帝国がアメリカと同じく多民族国家であることである。ただしこれらの二つの点は、意図的には本書では書かなかった。

倉田 稔『グローバル資本主義の物語——その発展と矛盾』日本放送出版協会二二〇ページ、(本体)八七〇円。

3 オーストリア関係

Kann, A History of Habsburg.

書評は、『三田学会雑誌』に出したので、割愛する。

書評

エーリヒ・ツェルナー『オーストリア史』

エーリヒ・ツェルナーの大著『オーストリア史』が翻訳された。ツェルナーは、ウィーン大学の国史科の正教授で、先年亡くなった。本書は、オーストリア史を学ぶための基礎であったが、大部なために、なかなか翻訳がされなかった。すでに仏語、中国語に翻訳されているが、なぜか、まだ英米語に訳されていない。翻訳の作業というのは、膨大な作品を訳してもらうのが、その国の読者にとっては有難いことである。短いものであれば、容易に読める。その点で我々は、訳者と出版社に感謝するべきである。現在の日本の出版状況から見れば、良心的事業である。訳者にも人をえた。ウィーン大学で、評者もツェルナー先生の講義を聞いていた時、この本を持参した。多くの学生もそうであったであろう。先生は半年講義をくり返されたが、その各半年講義では、オーストリア史の一部分の時期だけを講義した。彼はパトリオート(愛国者)である。大きな講義室で、授業手伝いが、地図を写したり、窓を開けたりして、補助していたことを思い出す。

本書は、先史時代から現代まで、また勿論、政治・経済から芸術・文化ま

で、扱う範囲が長大で幅広い。翻訳の本文で七〇〇頁というほどの膨大な分量であっても、博識なツェルナーにとっては全てを書ききれない。それに一国の全史をまとめるにも、常識で言っても、七〇〇頁では少ないだろう。本書は、何回も改訂されており、この訳書は第八版、つまり最終版をもとにしている。本書は、余りにも多くの事項が書かれているために、概括的となり、はっきり言って、つまらない。だがとにかく、オーストリア史を学ぶ人は本書から始めなければならないし、そういう定評となっている。それゆえこの翻訳によって、我々日本人としては、研究を進める上では大変便利になった。本書は出るべくして出た書である。

著者は、オーストリアの歴史を、先史時代を除けば、九つに分けている。初めの二つの時期のあと、次の年で章を分ける。九七六年—、一二四六年—、一五二六年—、一六四八年—、一七四〇年—、一八四八年—、一九一八年— 現在。この区分は納得的であろう。そして各々の時期の主要歴史を叙述して、その同じ章で、その時期の社会、経済、文化あるいは芸術、あるいは学問などがそれぞれ論じられる、という構成である。これらの体裁からして、本書は、オーストリアの歴史事典という風にも読める。

そのうちでも、経済史は、細かい事実の羅列である。彼が経済史家でないこと、またドイツとオーストリアでは経済史家でも興味深い方法論を持っていない、あるいは用いていないからである。

訳書では、ドイツ語の言葉の最初のsは濁らないなどと、細かく考えており、心強い。新訳語も工夫されている。例えば、アウスグライヒは、普通は、妥協、調整であるが、和協とされる。

オーストリア史で次に訳される本があるとすれば、これよりも大部で、より興味深いフーゴー・ハンチュの書『オーストリア史』二巻本、であろう。

(彩流社 発行 二〇〇〇年、九五〇〇円)

(『週間読書人』)

書評

島崎 隆『ウィーン発の哲学』未来社 2000年 248ページ

本書は専門の哲学書かと思ったら、そうではなかった。というのは、「哲学」という言葉が、狭い意味の哲学でなく、広い意味の哲学であり、また哲学そのものは、「Ⅲ」に書かれているだけだからである。本書は「Ⅰ ウィーン的生活と文化を哲学する」「Ⅱ オーストリアの教育と『哲学すること』」「Ⅲ 『オーストリア哲学』の可能性」という3部からなる。そして、本書の多くは一般の人々に向けられている。著者は、「海外滞在しても、もっぱら資料のコピーをしまくる研究者……」という批判に対しても応じたかったことも、本書のひとつの意図だとする。本当にそうであり、資料をコピーするならばほとんど日本にいてもできるわけで、誰でも折角留学したのならその土地の文化をじかに吸収した方がよい。

ギムナジウムの宗教教育の例が紹介され、それは日本で考えられない、異質な、内容のあるものであった。これは宗教教育というよりも一種の道徳・人間教育である。明治時代にヨーロッパに行った渡辺龍聖（東京音楽学校、小樽高商、名古屋高商の校長、倫理学）が、学校で道徳教育はないものかと問うと、「そういうものはない、宗教の時間があるから」という返事を貰ったことを、思い出す。日本には道徳教育の時間があるが、私は日本で担当の先生に聞いてみると、何をやっていいか分からないとの答えである。

ウィーンの哲学勉強のとりかかりとして、著者は3冊の本をあげ、そのうち、ジョンストンの『ウィーン精神』、ショースキの『ウィーン世紀末』は、ウィーン文化・思想の勉強のために非常によい、と私も思う。「Ⅰ」では、現代とウィーン世紀末、という好節がある。

オーストリアでの教科書・教育法・教育計画を、著者は示している。それらの方向は日本と全く違うことが分かる。本書95ページの項目になぞって言えば、日本では、生徒を大人の資格へと育てない、責任意識は育てない、人間存在の意味……に対する根本問題は考えない、法治国家へ尽力する準備はしない、共同作業の準備はさせない、批判的で寛容の準備はさせない、とな

る。日本では、勉強や教科書の覚え込み、ペーパー・テストで同世代の他人よりもよい点をとること、本人だけの成績の優越を考える、入学試験のための教育である。

オーストリアの高校で、心理学や哲学が教えられる。これらは日本では、ない。オーストリアでは「人間」というテーマが最重要となっているからである。私は、日本で憲法くらいは高校で教えてもよいと思う。オーストリアでは美的価値が考慮されている。日本では大学受験のため、事項を覚えることに努力が払われるから、その余裕はない。しかしオーストリアでも第1次大戦前は、大学に入るための教科だけが重要だとされていた(ツヴァイク『昨日の世界』)から、今の日本は、そのころのオーストリアに等しいともいえる。つまり80年は遅れているのである。その上、日本の政府は戦前のように戻りたいという教育政策を考えているから、もう絶望的である。

大学入学資格、高校卒業資格を、日本で出すよう提案している。日本では高校は全入だし、今後、少子化により、学力のない人が大学にどんどん入るようになるから、これはもう日程に上げてよい。

オーストリアに50年住んでいる初老日本人女性と、私は話をした。彼女は息子2人をオーストリアの大学で学ばせた。ギムナジウム時代に論文をよくかかせられて、息子たちの力がついた、オーストリアの教育に信頼していると、彼女は言う。日本では受験勉強のため、そんなことはできない。

オーストリアのギムナジウムの理念は、自由、人間らしく育てるヒューマニズムであると、また日本では管理であると、著者は言う。日本の文部省のお役人さんたちも本書を熟読して、考え直して方向転換してもらいたい。日本は中央集権国家であって、理想的な教育が簡単にはできないだろうが。「II」章は、その上、特に日本の中学・高校の先生に熟読玩味していただきたい章である。国民的啓蒙の書になるであろう。

「III」章は、オーストリア哲学の可能性である。ドイツの哲学とオーストリアの哲学が違うことが述べられる。これほど違うのだから、なぜ日本の哲学者・哲学史家はオーストリア哲学を固有にとりあげて研究して来なかったの

だろうか、疑問が湧く。尤も、歴史学も思想史学も、オーストリア研究は、日本では最近始まったばかりだから仕方ないかもしれない。それにしても著者は、もしこの研究をおし進めるとすれば、大変よい、素晴らしいテーマを持ったと言えるであろう。期待したい。

(『図書新聞』2001年2月24日)

『ハプスブルク歴史物語』によせて

今、ハプスブルク・ブームだそうである。

ハプスブルク帝国とは、第一次大戦で滅んだ中欧ヨーロッパの最も由緒ある帝国である。現在でいう、オーストリア、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、北イタリア、クロアチア、ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、南ポーランド、一部ブルガリア、一部ルーマニア、一部ロシアを含んでいた大帝国だった。

小生は、一九九四年に日本放送協会出版から、つまりNHKブックスとして、この『ハプスブルク歴史物語』を出版した。もちろん、ハプスブルク・ブームだとは知らないで、である。

十年ほど前まで、日本人はハプスブルクの歴史がよく分からなかった。教科書にもあまり載っていなかった。体系的な本もロクになかった。私もハプスブルクの歴史をよく知らないで、オーストリア政府留学生となって、ウィーンに二年間、留学した。だからその時、ハプスブルク帝国の歴史を、英語の大部の本を読んで知ってから出かけた、という次第である。

そこで小生は、自分の体験から、便利を考えて、十年ほど前に、テイラーの名著『ハプスブルク帝国』を、筑摩書房から依頼されたのだが、翻訳して出版した。ただしこの書は近代が中心である。そのころから、この本によって、ハプスブルク帝国について日本人は詳しく知り得るようになった。

文部省による一年間の、小生にしては二回目のウィーン留学から帰って、NHK出版から、ハプスブルク全史を書くよう依頼された。小生がねらったのは、通史で、かつ特色を出し、一般の人にもよく分かるという本だった。

まず、ハプスブルク帝国で最も重要で、かつ日本であまり取り上げない人物を詳しく書いた。ヨーゼフ二世である。マリア・テレジアの長男で、マリー・アントワネットの兄である。

ついで、ハプスブルク帝国で世界的に誰が有名かと考えたところ、ベートーヴェンとモーツァルトだと気がついた。そこで両者をとりあげた。シューベルトも有名だが、小生は、音楽史を書くつもりはないので、先の二人の楽聖を政治的に扱ったのである。もちろん、オペラや、ウィーン・フィル、大学者フロイト、そして、ほんの少しではあるがヒトラーなども扱った。そこでは建築、美術、都会など、現代に影響を与えている側面を多面的に描かざるをえなかった。

小生の専門は二十世紀初頭のハプスブルクなので、今回の本は、いきおい、一九世紀末と二十世紀初頭をかなり詳しく書いてしまった。それにまた、現代に近い方を詳しく、過去は簡単にという遠近法で書いたのだった。ただし書き上がって、アンドレアス・ホーファーを書いておけばよかったと、気がつき、反省した。

本書については、『信濃毎日新聞』、『日本経済新聞』で、扱われたくらいで、あまり書評は出ていない。大体、分かりやすく面白いけれども、通史だから、書評に出るはずはない。しかし、大変よく売れていて、読んだ人も面白いと言ってくれている。だから、小生の所期の目的は達したわけで、満足している。現時点（一九九四年十一月）で、一万二千五〇〇冊印刷した。もっとも、よく売れているのは、値段が安いからかもしれない（八六〇円）。

なお、ハプスブルク近世史の研究の大家、丹後杏一先生が、近く出る『商学討究』（小樽商大）で書評をして下さることになった。

本書あとがきで、小生は、現在大問題になっている、ボスニア、ヘルツェゴヴィナの民族紛争を論じた。実はこれは、出版社の要望であった。

ハプスブルクがなぜブームなのか。私は、ハプスブルク帝国が多民族国家だったから、また今日、旧ハプスブルクの地で民族紛争が起きているから、と考えている。だが新聞によると、王室ブームや、ハプスブルクがヨーロッ

パ共同体の思想の原点だったから、とも言っている。

もう無くなってしまった帝国が、今になってまた、随分興味を持たれて思
い出されているものと感心する。

実際しかし、中欧・東欧に行ってみると、ハプスブルク帝国の歴史は強く
それらの地に刻印されているのである。

小生は、ここまで真面目に論じてきたが、実はこの本が売れているのは、
ヨーロッパ旅行に行こうという人が、単なる旅行案内では満足できない人た
ちが、これを格好の本として買っているのではないか、あるいは、ヨーロッ
パでの体験でハプスブルク帝国の意義の大きさと興味を感じた人が、勉強の
おさらいとしてこれを買っているのではないか、という予感がしてならない。

ウィーンの森の物語

「北海道新聞」99, 10, 8 (朝) 小樽版

小樽商大付属図書館長の倉田稔教授が一九九〇年から三年間、政府の研究
員としてウィーンに滞在し、その後も度々同地を訪れた経験から、日本では
あまり知られていないオーストリアの習慣や人柄、複雑な歴史的背景など
について多面的にとらえた随筆集。

本書ではまず、著者がオーストリア人家族と過ごした中で見た、同国の子
供と学校のかかわりや、ホームパーティや墓参りなど、オーストリア人の身
近な生活を描く。

また、外国人労働者の置かれている立場や、同地で知り合った多彩な民族
との出会いの中で、同国の人種的な多様性とそれにまつわる問題点を指摘し
ている。

さらに、歴史的背景にまで話は進む。ユダヤ人虐待の歴史とユダヤ人に対
する複雑な市民感情や、ヒトラーと組んだ第二次世界大戦の傷あと、旧ソ連
による占領にまつわる苦い思い出などを読むうちに、同国の社会構造が立体的
に把握できる。

著者はいたずらには、オーストリアと日本の違いを強調しない。むしろ、

オーストリア人の喜怒哀楽の中に日本人との共通点を見出し、個人と個人が愛情を持って付き合えることの大切さを伝えようとしている。

(NHK ブックス 970 円)

『ウィーンの森の物語』

小生は、主に、一九七六年から七八年に、オーストリア文部省の留学生として、そして一九九〇年から九一年に、日本文部省の在外研究員として、オーストリアの首府ウィーンに留学した。特に、後者の際の滞在期間には、しっかりと日記をつけていた。というのは、ウィーンの友人の家族の中で一年間、共に生活し、それが、非常に興味あふれる生活だったからである。

その時の経験を主な材料として、日本放送協会出版から、つまり NHK ブックスとして、『ウィーンの森の物語』（副題 — 中欧の人々と生活）を、一九九七年四月に出版した。

私がいたその家が、ウィーンの森の中に、そしてウィーンの端にあったから、そういう題名を付けた。付けたとたん、ヨハン・シュトラウスにもそういう曲があったと、思い出した。

ウィーンの人には、なかなか外国人と友達になってくれないので、私の経験は、面白いという点に加えて、珍しいのではないだろうか。また、同じくウィーンに留学中の友人研究者は、これの原稿を読んで、ショックだったと、私に手紙を書き送ってきた。なぜなら、よくそこまで深く、ウィーンの人々の中に入れたものだという、彼の思いからであった。

この日記は、まず非常に短く整理してみたが、それをまた半分にして公開したものである。

同じく、小生は、一九九四年に、NHK ブックスで、『ハプスブルク歴史物語』を出しており、今回はその姉妹編である。前書は歴史で、本書は現代である。前書も、相当読みやすい本ではあるが、真面目な歴史書であり、本書の方が、その性格上、もっと一層読みやすく書いてある。前書は、一九九七年三月で、二万二千五百部出たが、本書がそれよりもっと多く出まわるとす

ると、ちょっと大変である。

日本でも、商大でも、国際化が唱えられている。だが国際化とは、第一に、本書にあるように、外国人と心から友達になることだと、私は信じる。

(『緑丘』より)

『ウィーンの森の物語』

小生は本書を、ノン・フィクション文学のつもりで書いた。サマセット・モームの『人間の絆』のようにした。テーマをウィーン社会全体とし、働く一家族を主人公にした。時代は東欧崩壊の時である。このウィーンのように事実上の西欧を見すえながら、民族、東欧、アジア、日本を考察した。結婚した日本人女性の例、子供から老人まで、男女、反ユダヤ主義、を扱った。アジア対ヨーロッパを対比した。また詳しい市民生活を考察した。本書は、すでに上で述べたように民主文学のつもりである。ただし、そう判断されないかもしれないが。

これには書評が2つでた。『人文研究』および『中央評論』である。

私は商大生、つまり若い世代の日本人にも読んでもらった。その中で、彼らは主人公の生活信条に、おおいに共感している。

『ハプスブルク・オーストリア・ウィーン』(成文社)

二〇〇一年に、『ハプスブルク・オーストリア・ウィーン』(成文社)を出版した。主にこれまで発表した作品を収録した。それらは次である。

一九九七年にオーストリア建国千年を記念して、日本中で記念展が行なわれ、私も、『朝日新聞』紙上で参加した。それらの記事を入れた。次に、ウィーンにシュトック・イン・アイゼンという記念物があり、この話を、民話から紹介した。一九世紀前半にビーダーマイヤー文化があり、オーストリアの文化史では重要なので、これを書いた。フランツ皇帝時代、一九世紀の文化を、ドイツ文学会(私は入会していない)や講演で述べたので、採録した。ハプスブルク国へ嫁にいったクーデンホーフ・カレルギー・光子の生涯を、私は

国会図書館で調べて、載せた。この論文の初出誌は売り切れである。オーストリアのファシズム時代を、留学での調査の結果として出した。同じく留学中に調べたウィーンの自治体の話を記した。主に現在のそれである。私の留学中に東欧が倒れ始めたので、これについて、いくつか書いた。初めの留学をする時に、準備のために、昔読んだR・A・カンの本について、書評であるが、編成しなおした。私は、ヒルファディング研究者であり、そこで彼について、実地調査の舞台裏を示した。私は留学中に、ドイツ語に苦しめられたので、その話を思い出として書いた。私の留学中に、現天皇の即位式があったので、私はそれゆえ日本にはいなかったが、オーストリアの新聞で、興味深くそれを紹介していたので、訳出した。外国での即位の受け取り方は面白いものである。私の著書『ハプスブルク歴史物語』（NHK ブックス）の自分による紹介（これは本誌に出させていただいたもの）をし、そして『ウィーンの森の物語』（同）を、自分の文と他人の文で示し、その本に書ききれなかった部分、そしてその後の話を入れた。最後に、ウィーンでの生活と、一種の観光案内を加えた。

成文社のホーム・ページでも掲載したのだが、いままで出したものをすべて、本書に入れたわけではない。話は多方面にわたっているはずである。

『ハプスブルク文化紀行』

『北海道新聞』2006年 平成18年8月11日（金曜日）小樽後志 26面
「中世オーストリアの豊かさ解説」

[写真]

小樽商大で社会思想史を教える倉田稔教授（六四）が中世オーストリア周辺の文化史をまとめた「ハプスブルク文化史紀行」（NHK ブックス）を出版した。今年生誕二百五十年を迎えたモーツアルトらの人生をたどりながら、政治、宗教と文化との関係をわかりやすく説明している。

B 6 判，二百三十七ページ。オーストリアを支配したハプスブルク家の約七百年間の変遷と，文化に果たした役割などをまとめた。ハプスブルク時代にモーツアルトやヨハン・シュトラウスらの優れた音楽や絢爛豪華な宮殿建築，絵画などの豊かな文化が栄えたのは，政治力を誇示するため，王家が獲得した広大な領土から得た富を文化振興に注ぎ込んだことを紹介している。

倉田教授は一九七六年から二年間，ウィーン大学に留学したのを機に，オーストリアの歴史への感心を深めた。近年はオーストリアを訪れる日本人観光客も増えており，「文化史を知ったうえで旅行すると，建物や絵画，芸術などを理解するのに役立つはず」と話している。著作は二十冊目。九百二十円。」

この執筆は名はないが，中澤広美（当時・小樽支社）記者である。

本書では，1つ誤訳した。

ページ	行	誤	正
143,	4	三～四	三四
164,	5		「時代にはその芸術を。芸術にはその自由を」

インターネットで次の記事が出た（社会科教育について考える 7月末から8月始めの読書録）筆者不明。

私は常日頃，「レンブラントの『夜警』はバロック初期ではなく，ルネサンス最末期に入れるべきである」と授業で主張していたが，「レンブラントはバロックに反対するプロテスタントであり，後期ルネサンス派に入れるべきであろう」などというくだりは，事得たりといった感覚であった。